



蘇る一瞬 みとよ写真帳 page 53

このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。



※文書館では、まちの風景や催事などの古い写真を収集しています。原本はお返ししますので、情報の提供をお願いします。【文書館 ☎63・1010】

懐かしの1枚
ノリの養殖
昭和50(1975)年代前半
仁尾町父母ヶ浜

仁尾町のノリ養殖は昭和41(1966)年頃からはじまり、盛んに行われたのは昭和50年代である。昭和50年代前半には、7の業者が操業していた。当初は、仁尾の広い砂浜を利用したノリ網による杭打式養殖が行われていたが、昭和50年代には浮き流し式が主流となった。

「この写真は、父母ヶ浜でのノリ養殖の種付け作業の風景ですね。毎年10月から12月にかけて、愛媛県西条市の漁師たちが父母ヶ浜に来て作業をしていますよ」と話すのは、仁尾漁協職員として40年間働いていた楠本久雄さん(82)。

「杭打ちされ、砂浜に張られた網が映っていますね。当時、ノリの種付けは、4〜5枚重ねた新網を等間隔に浜に並べ、その上にノリの胞子がついた種網を被せて行っていました。父母ヶ浜のように、潮が引いて広範囲に砂浜が現れる場所が種付け場所に適していましたよ。塩田の前の浜も遠浅で、こちらでは養殖業を営む仁尾の漁師が同様の作業を行っていましたね」と当時を振り返ります。

「1週間から10日程度で種付けが完了すると、西条市の漁師は網を持ち帰り、自分たちの海でノリを養殖しました。一方、仁尾の漁師は、網を葛島の沖合に移します。そこでは浮きを利用して海域に張り込み、ノリの成長を待ちます。ノリが成長するのは1月から2月にかけての真冬です。彼らは、毎日のように沖に出ては、網にひっかかったごみなどを手作業で取り除いていました。作業を手伝う漁師

の奥さんから「海水が冷とって、手も荒れるんや」という話を聞き、ノリ養殖の大変さをうかがい知りましたね」

また、写真右の防波堤付近では、マハマグリ養殖も行っていました。

「この頃は漁師と漁協職員が一丸となり、様々なことに挑戦しました。もちろん失敗もたくさんあったけれど、共に苦労した日々はとても充実していました。仕事が終わると、みんなが仁尾の夕陽に癒されていましたよ」と当時を懐かしそうに話してくれました。

「思い出の1ページ」

新編 後記

年度が始まり、広報担当2年目を迎えました。この仕事をしながらつくづく感じるのは、「みとよには面白い人がたくさんいる!」ということ。地域を思う熱い気持ちを持った人々に出会うと、その熱をそのまま伝えたいという欲求が高まります。少しでもそんな紙面が作れるよう、引き続き、広報担当一丸となって、面白い広報、目指して頑張ります!